

大東文化

千年古劍回風雲匣裡
龍吟深在少我拭壁寫
神氣尚寒鉅跡七星文
氏家道兄正之舊作古劍
許雨春

大東文化大学
創立四十周年記念事業
振興建設資金募集趣意書
大東文化大学後援會趣意書

大東文化大学を築いた人々〔その一〕

—歴代会頭・総長・理事長—

本文 18・19 頁 参照



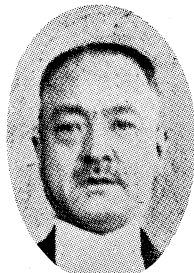
明 長 士 員 長
總 長 士 員 長
第 四 代 總 長
第 八 代 總 長
鶴 沢 明



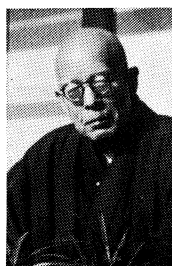
加 藤 政 之 助
第 六 代 總 長
衆 議 院 議 員
貴 族 院 議 員



大 島 健 一
第 三 代 總 長
陸 軍 中 將
陸 軍 大 臣
貴 族 院 議 員



大 木 遠 吉
大 東 文 化 協 會 々 頭
司 法 大 臣
鉄 道 大 臣
貴 族 院 議 員



土 屋 久 泰
第 十 一 代 總 長
芸 術 院 會 員



酒 井 忠 正
第 九 代 總 長
貴 族 院 議 員



松 平 頼 寿
第 七 代 總 長
貴 族 院 副 議 長



平 沼 駿 一 郎
第 一 代 總 長
秘 密 院 議 長
內 閣 総 理 大 臣

大東文化大学 後援会発会式

昭和三十六年七月二十八日
於ホテル・ニュージャパン



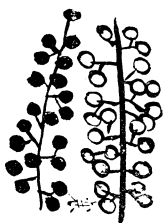
写真説明 上左から岸会長、清瀬一郎、南条理事長、藤山愛一郎、藤井崇治、坂信弥の諸氏

一堂に会して

後援会役員会

第一回役員総会を開催

於ホテルニュージャパン



財政界の有力者

大東文化大学

岸後援会長の外遊談をかねて

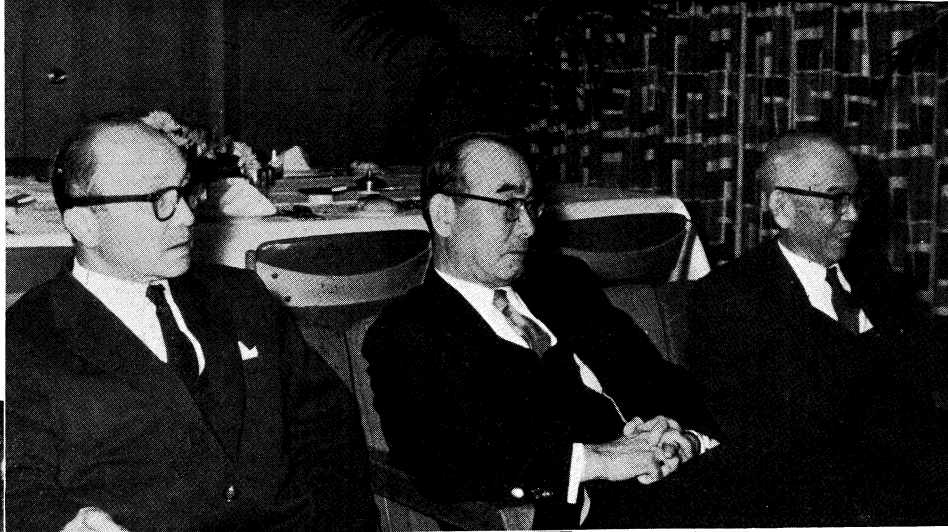
昭和36年10月12日



写真説明、上段右より岸会長、南条理事長、中段右より河合良成、福田赴夫、椎名悦三郎、岸会長、杉道助、司忠、賀屋興宣、永野護、下段右より野尻哲二、石光栄、姫井忠義（坂大商証券社長代理）本田弘敏、挾間茂、塩谷温、安西正夫、末定雄成（飛鳥土木社長代理）敬称略

募金活動始まる 鉄鋼界代表者との会談

昭和三十六年十一月二十二日
於 ホテル・ニュージャパシ



右より河田鋼管社長、小島八幡製鉄社長、山地常任理事



富士製鉄社長
永野重雄氏



左より岸会長、南条理事長、金子理事

大東文化

大東文化大学後援会

会 報

No. 1

流れはとほし東洋の
古き鑑を温ねては
知新の実をかさねむと
日夜にはげむわれらあり
(校歌の一節より)

(目 次)

御 挨拶……………岸 信 介……………二

理事長就任の御挨拶……………南 条 徳 男……………四

大学の飛躍的發展に際して……………平 島 敏 夫……………六

論語解説『温故知新』……………猪 口 篤 志……………八

祝 詩……………塩谷温・高田真治……………二三

恩師塩谷先生……………坂 本 通……………二三

学園の現状について……………金 子 昇……………二三

大東文化大学創立四十周年記念事業 建設資金募集趣意書……………一五

大東文化大学後援会趣意書……………一四

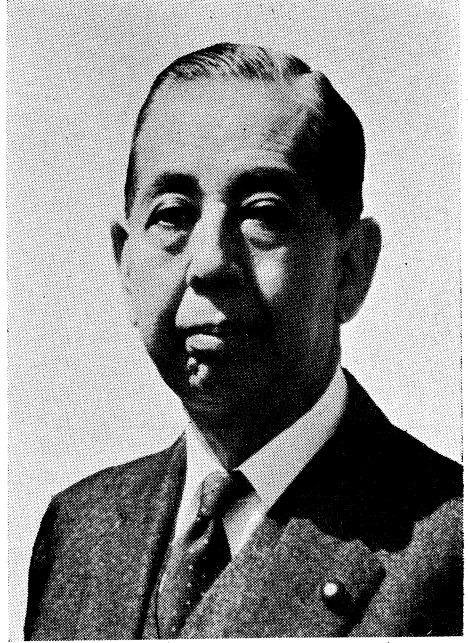
大東文化大学後援会だより……………村 田 克 己……………二六

大東文化大学を築いた人々……………表紙二

新任理事紹介……………七

後援会発会式、役員総会……………グラフィア……………一

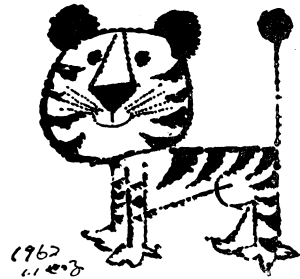
表紙の書……………土屋久泰書……………表紙一



ご挨拶
孝ほか

私は総理大臣の職を辞任致しましてから一切の団体役員等をお断り致し、同志と共に日本の将来に思いを致し、日夜研鑽に努めて参りましたところ、このたび計らずも、大東文化大学後援会長をお引受する事になりました。

その第一の理由は従来私は次代を背負う青少年の教育について深い関心を持っており



若い人達に日本人としての誇りと自覚を持たせ、世界の人々から信頼と尊敬を受けるような国際的人物を育てることを念願としておつたからであります。

第二にはこの大東文化大学は大正十二年、日本の激しい思想混乱期に際し、飽くまで日本民族精神の自主性を確立すると共に、東洋の学芸を振興し、これを敷衍して世界に問わむとする目的を以て先輩政治家が国会に建議し、貴衆両院の決議を得て作られた特殊の学校であるからであります。

同校は明年を以て建学四十周年を迎えますが、これを記念して創立当初からこの大学に縁故の深い南条徳男君を理事長に迎え、大学の振興建設計画を強力に推進されることになりました。

ところが、この学校は少数精鋭主義であつたため、卒業生の数も極めて少なく他の私立大学のように多くの卒業生をもつて、大学の維持発展に力を致すということが非常に困難な状況にあります。そこで私も先輩同憂の士の遺業を発展させることは今日の政治家の責任であると存じ、あえて、後援会長を御引受け致しこの大学の振興建設計画の推進に協力することになりましたわけであります。

どうか私の意のあるところを御諒察頂き皆様の御賛同を得て日本民族の明日の建設のために大東文化大学後援会に何分の御力添へを御願申上げる次第であります。

——昭和三十六年七月——

理事長就任のご挨拶

大東文化学園理事長

木下代議士

私はこのたび大東文化大学の理事長をお引受致すことになりました。実は私は私学の経営についてはすでに東北薬科大学とか南光学園の理事として多少の経験を有ち、その経営の容易でないことを十分承知しております。また、政治家として多忙の日常を過しておりますので大学の経営に専念することできません。それにも拘らず、創立四十周年を期して、振興発展計画を遂行しようとする重大な時期に遭遇している大東文化大学の理事長に就任致しましたのは、次のような事情によるものであります。

その第一は、この大東文化大学の創始者の一人である故木下成太郎氏は北海道選出の政治家として私の先輩であり種々とお世話になつた関係上因縁浅からぬものがあることであります。この学校が開設されました基をなす「漢学振興に関する建議案」は当時政友会の代議士であつた木下成太郎先輩が提唱され当時そうそうたる政治家の賛同を得て議会に呈出されたものであります。現存者では清瀬一郎、星島二郎、植原

悦二郎らの人々が呈案者として名を連ねておられます。開校後は、木下代議士は学校経営の責任者として尽力されたのであります。このため、私は郷党の先輩である木下代議士のお手伝に参画しておつたわけであります。ことに昭和十一年に私が代議士に初当選しましてからは九段にあつた学校を池袋の旧の校舎に移転するに際して学校の会頭松平頼寿（貴族院議員）氏、木下先輩の要請によつて微力を致したようなこともあり、この学校の創設当所から少なからず関係を有しておつた次第であります。こういうわけで、この学校の現状については深い関心を有つておつたのであります。

第二には前総理大臣岸信介氏が、この大東文化大学の振興発展に大いに関心を持たれ、政界の先輩が、国会に建議してつくり、財界人と協力して維持してきたこの学校をこのまま放置しておくわけにはいかぬ。是非ともこの学校を盛りたてて創立当時の建学の精神を今日の時代に生かした立派な学校にして、日本の次代を負うしつかりした青年を社会に送り出



南条徳男氏 明治二十八年、室蘭に生る。東大法学部卒弁護士となる。衆議院議員当選八回。建設大臣、農林大臣を歴任。現在、全国道路利用者会議会長、日本ユースホステル会長。国會議員中南米研究会会長である。

すことは、この学校が創設された時以上に今日は必要なことである。と云うわけで、この大学の後援会長を引受けられたのでありますが、その際学校法人の理事長には南条が因縁も浅からぬものがあるから是非とも私にやれという要請があつたのであります。

だが然し、単に学校に対する因縁や岸先生の推薦によるという以外に私自身も今日の大学教育に対しましては、政治家の一人として非常に憂慮致しており、このままでは日本民族の将来のために決してよろしくない。今日のようにアメリカナイズされた人間や、ソビエト中共一辺倒の人間が多くて、

日本人としての主体性を持つた人間が少ないという事は、戦後教育の悪い一面でありますから、これを是正して行かねばならない。それには学校教育の過程の中で真の日本人としてのバックボーンを植えつけなければいけない。この為には、この大東文化大学の建学の趣旨を今日に生かして、立派な青年をつくるのが非常に必要のことであると確信致しておる次第であります。尚、私は私学の振興という事が、今日の日本に果している役割を非常に高く評価致すものであります。私自身のことを申上げては恐縮ですが、私は二高、東大と官立の学校を出しましたが、中学は仙台の私立の学校南光学園現在東北高校でありこの学校でたきこまれた教育は、今日でも私の人間形成に非常な影響を及ぼしております。私学の特長は学校の個性を十二分に生かした教育ができるということにあります。

このような次第で、理事長就任を御引受けすることに成りました。然しながら、最初に申し上げましたように私学の発展は容易ではありません。日本の次代を負う青年教育に深い関心を持たれる方々の強力なる御支援が必要であります。どうか、私の意のあるところを御諒察頂き何分の御後援をお願い致します。



大学の飛躍的發展に際して

学長 平 島 敏 夫

大東文化大学が従來の池袋の地を去つて新天地に拡大發展しようという考え方は三千の卒業生の悲願であつた。ここ数年來胎動してきたこの構想が岸前総理、南条徳男元農相らの深い御理解と御努力を得て実現への第一歩を踏み出したことは誠に喜びにたえない。幸いに新校舎も第一期工事は完成し第二期工事も殆んど完成に近い。

新校舎の所在地板橋区志村西台町は武蔵野原野の東端、丘陵の尽きるところ、関東大平野が広がり始まるところだが、一千万人口の首都大東京とはいへ、この志村西台町は騒然たる都心から離れて、眺望もよく、学業環境もいい。

大学はこの環境の中でこの機会に文学部と経済学部が各々独立して新しい第一歩を踏み出すことになった。大学はその創設時の理想である、「東洋古典ノ雄大ナル思想ト西洋科学の精緻ナル智識」を調和融合して「国民思想ノ健全ナル発達

ヲ遂ケシメ」「世界ノ文運ニ貢獻セン」とする理想を今日の時代に適合せしめて大東独特の發展を遂げるべく教職員一体となつて邁進、新しい学部の新設に努力を致している。大学の目的は勿論、真理の探究をすると共に最高の教育の府として、社会の各方面において指導的な役割を演ずべき人材を育成することを社会的使命としている。わが大東文化大学においては特に教育が日本民族の力の源泉であることに思いを致し、日本人としての主体性を堅持した人物の養成に努力したいと考えている。明治維新後西欧の文物を摂取して急速に近代国家として進歩發展を遂げ、敗戦後、短時日に今日の繁栄を造りあげた日本人の優秀性は、教育の力によつて發揮されたものである。日本人のバックボーンの錬磨育成を新しい校舎を得た大東文化大学のモットーとして今後の着実な發展を期したい。

平島敏夫学長略歴 明治二十四年、宮城県高鍋町生れ、一高東大
法卒、欧米留学を経て内務書記官、衆議院議員、満鉄副總裁
電源開発理事歴任、現職、参議院議員

新任理事の紹介

— 学校法人大東文化学園経営陣の強化 —



学校法人大東文化学園は理事長に南条徳男氏を迎えると同時に理事会を強化するために左の人々の就任を見た。

寿原正一氏 衆議院議員、国産自動車協会長、東京寝台自動車社長、専大経済卒
(写真上左端)

水島広雄氏 法学博士、そごう社長、中央大学東洋大教授、東洋大理事、中大卒
(写真上右端)

中山正男氏 作家、ユースホステル副会長、馬喰一代、一軍国主義者の直言などの著書がある。専修大中退(写真上右より二番目)

太田亥十二氏 元東京ガス会長現顧問、高島屋取締役、横浜商工会議所理事生系取引所理事長、慶応大卒(写真下右)

山田 寿氏 元総理大臣秘書官、元毎日新聞記者箕山社代表、京都大学卒(写真下左)

従来よりの学園の理事には、平島敏夫(参議院議員、学長)堀田太郎(卒業生大学事務局長)小林元(本大学教授)坂本通(卒業生城南高校教諭(写真上左より二人目)金子昇(卒業生法人事務局長)の諸氏がいる。

山田寿堀田太郎両氏は常任理事に就任。

論語解説

温故知新

猪口篤志

大東文化大学教授

温故知新
卷三

これは申すまでもなく論語為政篇にある孔子のことばである。原文は

子曰、温故而知新、可_レ以為師矣。

である。有名な句だから、別に解説の必要もなさそうであるが、存外世間ではいろいろな解釈をしている様に思われる。それに古人の解釈も決して一定している訳ではない。そこで一応その真意を探つて解説を試みることにする。

まず全体の主意であるが、これは人の師となる心掛けをのべたものと見る説と、師を撰ぶ方法をのべたものと見る説と両説ある。私は前説をとるが、一応後説をとる者の言う所を聞いて見ると、「孔子の時代の様に国家混乱の時には、家来はその君を撰んで仕え、弟子はその師を撰んで学ぶ必要があつた。仕えた君が凡君や暴君であつたばかりに、あたら才能を抱いて用いられなかつたり、非命に斃れたものもある。撰ん

だ師が、よろしくなかつた為に、邪説に惑わされ、危激の行に走るものも少くなかつた。この章は孔子が弟子達に、良識あるその師の撰び方を教えたので、先生たる者は温故知新の人を択ぶがよいといったのである」というのである。一応尤もの様であるが、現に孔子の弟子たちは、孔子という世にも得難い良師を択んでいたのである。改めて師の撰び方を教える必要もなさそうである。それに論語は大い対話したもので、相手によつて法をといて居り一般論というものは少い。こゝも弟子達を前にして、「お前達は、他日、人の師（指導者）となるべき人々ぢや。人を指導する立場に立つ者の心掛は温故知新ということではなければならぬ」といつたものと思う。そこで温故知新の意味は後に述べることにして、「本文の「可_レ以為師矣」は「以て師と為るべし」とよむがよろしい。「以て師と為すべし」ではいけない。「又以て師と為すべし」では、「温故知新」をするのは相手で「可_レ以為師矣」の方は、こちらがわになり、二句互に主語が異つて、こんな短い文で主語が一々変わるのもおかしい。「師と為るべし」とすれば、主語は一つで、甚だすつきりする。そこで初めに返つて、この章は人の指導者となる者の心得を説いたものと考える方が無理がない。

さて次に温故知新の意味であるが、これが中々簡単でない。温の字は古く「尋也」という註がある。後漢の鄭玄は尋は尋と同じで、「アタタメル」とよみ、一度冷えたものを蒸

し返す意味に見る。たしかに尋は尋と同じで、左伝の哀公の十二年に、子貢が、「盟は尋むべきなり、亦寒やすべきなり」とあつて賈逵の注に「尋は温なり」とある。これがどうも古義に叶つてゐる様である。

所が、「故きを温めて新しきを知る」では、何がなし言葉に落ちつきがない。そこで魏の何晏は尋は尋釋の尋で「タズネル」とよみ、研究するという程の意味に見た。宋の朱子は何晏の説を採用したので、徳川時代の様に朱子学流行の時代は、やはり「タズネル」の方が通りがよかつた。川柳に

ふるきをたづねて新しきを知る炙のあと

というのがある。これは朱子流によまないことには出てこない句である。然し東条一堂が「温の尋釋たるは它書未だ之を聞かざるなり。鄭は温尋を以て仮借して、習復おさむの義となす」というのは当つてゐる。それにしても温の字を「アタタメル」とよんで「蒸し返す」とか「復習する」とか見ても、何となしにピンとこない。

温にもう少し違つた意味があるように思う。温慈、温存、愠情、愠念、温詔、等の熟語にもその中に親愛の情をこめた意味がある。研究でも復習でもよいが、単なる科学者の分析綜合による推理研究ではない。美術研究家の古美術品に対する様な愛着めいたものに発する、芸術的研究（そんな言葉があるかどうかは知らぬ）鑑賞的研究とでもいう様な大切にするといい気分である。皆川淇園は温の字に注して「温なる者

は其の物を含んで去らざるの謂なり」といつている。温故の故の字は勿論古と音通ではあるが、論語の使用法は決して同じではない。古の字は所謂古人古時の場合で、「古者言の出さざりは、躬の逮ばざるを恥ぢてなり」(里仁篇)「古者民に三疾あり、…古の狂や肆、…古の矜や廉、…古の愚や直」(陽貨篇)などと使つてある。故の字は故人(旧知の人) 故事などの故で、「君子親に篤ければ、民仁に興る。故旧忘れざれば則ち民倫からず」(泰伯篇)「君子はその親を施せず。…故旧大故なければ則ち棄てざるなり。備はらんことを一人に求むるなかれ」(微子篇)の例に見る如く、故の字のは親しむべき、愛すべきものとしてつかわれるのである。だからこそ温故である。故は強ち古典とのみ見るべきではない。古典も入るだらうし、その外、古人のやつた事でもよいし、国家社会のきめたしきたりでもよいのである。荻生徂徠は、「故は国の故(曲礼) 天下の故(易繫辭) 幽明の故(同) 皆明に指す所あり、蓋し典故、故実の如し、凡そ先世伝ふる所のものは皆之を故といふ。先世伝ふる所は即ち我が学ぶ所」といつている。さればもつと汎く先祖(民族)の遺した文化的遺産といつてもよい。これを大事に亡ぼさぬようにし、その研究を盛にする。それが温故である。

知新の字は推理によつてしるので、暗記してしる識の字とは區別される。従つて覚る意がある。新はこれからなすべきことである。照井一宅は「知は覚悟の謂なり、記識に非ざる

なり。新は旧の反、更作を謂ふ。」といつて居る。ところで論語の本文には温故と知新の間に而の字がある。この而の字が大切な字で、「而後」の二字にあたるつかい方である。やはり照井の説に「而の字は三十而(立)、四十而(不惑)の而と同例、猶ほ而後のごときなり」といつたのはさすがである。つまり温故によつてこそ知新となるのである。延長は軌跡をたどることによつて知られる。その直線となるか円となるか拋物線となるかは、軌跡を吟味することによつて知ることが出来る。軌跡は過去の歴史であり、延長は未来の発展である。ヘーゲルの弁証法を思い出すまでもない。過去を含まない未来はない。それが世の変遷の道理である。

先祖の残した文化的遺産を大事に継承しつつ、次の時代にはいかにやるかを考える、これが指導者の任務でなければならぬ。安井朴堂先生は「政治にしても何にしても、全く他所のものを持つて来て、これをやれという、よい事もあろうが、悪い事も随分ある。それならといつて昔のままをそのままやれといつて、之亦役に立たない。故に昔の人の行つた事を、之を今日蒸し返す様に研究して、そしてその道理に基いて、今日にこうしなければならぬという。その方法、又は道理を知ることが知新である」といつて居られる。洵に卓見である。この而の字を普通の而に見ると、温故の反面、知新もやれという意味になる。故い事ばかり研究すると頑迷となり固陋となつて、時流にそむく。新しい方ばかりやると、軽兆

浮薄となつて、伝統に違ふ。両者を兼ねてこそ指導者の資格があるという考である。学者は象牙の塔にこもり、政治家は書物をよまず、いずれもよくない。真の指導者はそんなことではない、いけないというのである。中井履軒や亀井南冥はこの説である。

履軒はいふ。「温故と知新とは分明に両事、旧聞を忘れず別に新得あるを謂うなり、温習の中よりして新得あるに非るなり。注（朱子）未だ允ならず。或は能く古を温めて新得なく、或は新得ありて旧聞を忘る。並に以て師と為すに足らず」と。亀井南冥は温故と知新を解して「故事に練達し、時務に開明」といつている。唐の時代に高仲舒という人は博く典籍に通じて居り、斎澹という人は時事に曉習していた。宰相姚崇・璟は常にこの二人に就いて疑を質した。嘗て姚崇がいつた。「古を知らんと欲せば高君に問ひ、今を知らんと欲せば齊君に問う。以て闕政なかるべし」と。彼がその名宰相といわれた所以はここにあつたのである。

因みにいふ、孟子に「人の患は好んで人の師となるに在り」とある。好んで人の師となるのは確かに天下の通患であるが、論語のこの章には人の師となるべき道を説いている。孔孟相矛盾するに似ているが、そうではない。一知半解の者が人の師となると、何等補益する所がない計りか、所謂「夫の人の子を賊ふ」ことになるから、孟子は之を戒めたのである。世の人を指導し「万世の為に太平を開く」のは孔子の大

悲願であつて、孟子も孔子を学んで、民の救済に奔走したので、決して矛盾ではない。その点は誤解してはならぬ。

大東文化大学の教授陣

文学部は日本文学科に国語学者として著名な文学博士佐伯梅友教授を始めとして、俳諧文学の岩田九郎文博、上代文学の松浦貞俊、万葉研究の藤森朋夫、芸能研究の安田喜代門文博らが専任教授。

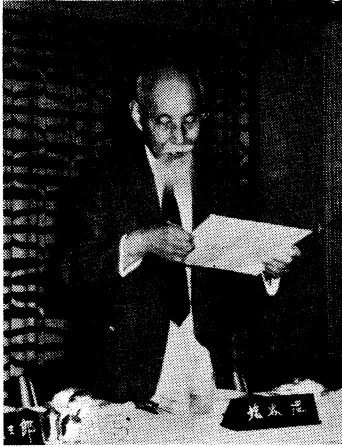
中国文学科は中国哲学の権威高田真治博士、下斗米晃博士、影山誠一博士、猪口篤志教授、真田但馬教授、小島政雄助教授、講師に竹田復文博、中沢希男氏らがいる。

新設経済学部は経済地理、工業立地論の権威佐藤弘理博、金融論の中村佐一経博、経済政策の井上貞蔵商博、原論、学史の古屋美貞経博、日本経済史に高橋梵仙経博アジア経済に須山卓経博、統計学に友安亮一、商学に深見義一、国際経済山内一雄、中近東経済事情小林元氏らが専任教授陣を形成している。

祝
詩

塩
谷
温

(文学博士)



恩師塩谷先生 理事 坂本 通

塩谷先生号は節山、一高、東大を卒業後ドイツに留学、帰朝後、東大教授、文学博士。漢文学界の耆宿である。先生の父上は青山と号し一高教授、岸先生も一高時代青山先生に教を受けた。祖父は箕山と号し幕府儒官でその兄は宿陰先生である。一家あけて学者の血統である。左図は後援会発会式の席上、岸会長に贈られたもの。音吐朗々と吟ぜられその響鏢たる元気には来賓一同三嘆久しうした。

泰東文化未全泯
今日會盟期更新
皇國復興人若肉
須揮建學大精神
大東文化大學後援會賦呈
岸會長榮正 鹽谷溫 同

祝
詩

陶
軒
高
田
真
治



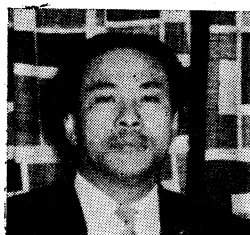
大東文化大学教授
文学博士
高 田 真 治

大東文化学園新校舎

西台原上学堂新
寮室宏壯闊、棘榛、
紫陌紅塵隔、林遠
富峰積雪入、窓親
讀書最是尊、明道、
經世祗当期、濟民、
懇囑青衿須、奮激、
成材達、識拯、進、

大東文化大学の現況について

理 事 金 子 昇



金 子 昇
大東文化学園理事兼法人事務
局長、大東文化学院本科学

大東文化学園理事長南条徳男氏の手許に「会頭之印」と刻した象牙彫の小印がある。

これは大正十二年九月、大東文化協会の初代会頭大木遠吉氏が彫刻家石井某に依頼して彫らせたものであるが、その後、大島健一、平沼騏一郎、小川平吉、松平頼寿、酒井忠正、鵜沢聰明氏等の各会頭に受け継がれてきた珍品である。当時、この印をめぐつて、江木千之、山本悌二郎、鈴木喜三郎、井上哲二郎、木下成太郎、加藤政之助氏等の間に数多くの

挿話があ

つたが、

昭和二十

三年四月

寄附行為

の改正に

より会頭

を理事長

に改めたので、問題の印は金庫奥深く蔵されて仕終つた。会頭の順序から数うれば現南条

理事長は実に第十一代目にあたる。誠にこの印は創立以来四十年の永きに亘り、本学変遷の跡歴々たるを見つめてきたのであらう。創立当初の九段の旧校舍より池袋へ、更らに三軒して板橋志村の近代的鉄筋四階建の立派な校舍にまで発展したのであるから既往を知るものにとつては感慨無量なものがあらう。昭和三十六年四月一日、学園の振興計画の大綱が発表されたが、その骨子は

一、建学の理想を基調とし、徹底せる人材教育を行い、名実共に東洋学術研究の最高学府を樹立するため、大東文化大学を充実拡張する。

二、総合一貫教育のため、高等学校を附設する。

三、東洋の医学技術を復興し、国内及びアジア諸国にこれを普及発展せしむる為、大東

医学技術専門学校を設置する。

四、東洋の思想、政治、経済の総合研究調査を行うため、東洋研究所を強化する。

五、東洋の伝統芸術である書道を振興し、民族精神を昂揚すると共に、青年の人間形成人格の完成を計る為、書道研修所を設置する。

六、体育館及び運動場を整備し、スポーツを通じて内外学生の交歓を行う。

七、沖繩出身留学生の進学及び厚生指導を期するため、沖繩学生会館を設立する。

八、アジア各地の思想、政治、経済其他主要部門の研究調査を行なうため、随時調査団を派遣する。

九、アジア及び欧米諸国の東洋文化研究機関と連絡提携し、学問の交流及び相互の親善を計る。

十、研究成果の弘報活動を盛んにする。と云うことである。

これに依つてこれを見るに、今後学園の運営方針としては、高校、大学を通じて、東洋の名節道義に徹底し、しかも国際的視野に立つ優秀な人物を育成すると共に、広くアジア及び世界に向つて日本及び東洋の学芸を普及

伸張せしめんとする重大決意がうかがわれる。

今度新設された**経済学部**は実にこの意義を實現せんとするものであつて、既に新しい講座が組まれ、教授陣もこの道の權威が顔を揃え指導に當つてゐる。曾つて中国を焦點として設置された東亞政経科は今やその旧殻を脱し、タイ語、インドネシア語、インド語、アラビヤ語の現地語を基盤とする地域經濟講座を軸に、國際經濟、國際事情、國際政治學國際經濟比較論等の広範な學問を取入れ、國際人としての知識と信念を持つ青年を育成せんとするものである。次に**医学技術整備専門学校**について述べると、この学校は元來柔道整復師養成所に発足し、既に五年の実績を有しており、それに衛生検査技師科を加え、本年四月より改めて設置されたものである。整復技術は恐らく有史以前からあつたと思はれるが、文献では大宝令の中にある「傷折科」と言うのが始めてである。其後口伝の形を以て傳承され、徳川時代に到つて漸く、オランダの技術が導入され、更らにフランス、ドイツの化学治療が加つて、今日の盛大を來したわけである。元々日本の技術の源泉は印度であり、印度から支那へ、支那から遣唐使に

よつて日本に伝わつたと云う。それはさておき、日本の整復技術は柔道と並んで世界に冠たるものであり、近年欧米諸國でも熱心に研究を續けているので、將來これを高度化し大いに普及させる方向に持つてゆくことも一案であらう。又衛生検査技師科は日本に於てはまだ三ヶ所だけ設置されているが、時代の脚光を浴び、医学界から非常な期待を持たれてゐる。次に、東洋に関する綜合的共同研究機關として**東洋研究所**を挙げたい。同所は最近広く學界、思想界から有能な研究者を招聘動員し、テーマ毎に部會を設け、主査を選任して研究を進める方針をとり、既に「日本近代思想史における儒學の地位」、「東洋の道德系譜の研究」、「日本文學における中國文學受容の諸相」、「清朝書道の源流考」、「アジア・アフリカにおける宗教、言語の問題」、「後進諸國に於ける中立主義の研究」、「東南アジア諸國における社會主義の研究」、「中國經濟の成長と制度變革との關係」、「中國の財政、金融制度とその運用に関する研究」、「アメリカの対アジア政策の研究」等の研究題目が進められてゐる。又本學の伝統とも言うべき書道は漢文と併行して特に重要科目であつて、講師陣は日本最高の權威を集め、毎日展、日展に

毎年数多くの學生が参加し、江湖の書価を高めてゐる。指導機關として**書道研修所**、**書道學會**がある。この外、スポーツを通じて内外學生の交歓を計るため、只今敷地の調査が行われてゐるが、これは数年前、來日したインドの大統領ブラサド氏との約束に基づくものである。本學としては、この外沖繩出身學生のための施設を作り、沖繩との密接な連絡を計りつつ、沖繩人年來の悲願である日本々土復帰運動に協力すべく、準備を進めてゐる。又アジア及び欧米諸國の關係団体との親善交流を期し、國際道義を宣揚し、世界平和の基調を形成すべく計画中である。今や國際政局は日々深刻化し数多くの國際事件が起りつつあるが、これを救うためには、世界の各民族が、崇高にして深淵なる東洋の哲理をその根本理念とし、相互の和解を計る以外にないと思ふ。

以上をもつて一応學園の現況及び今後の方針について述べたが、これを達成する為には何としても先賢同輩の士の協力が必要である。切に諸賢の御支援をお願いする次第である。

大東文化大学
創立四十周年記念事業

建設資金募集趣意書

学校法人 大東文化学園

大東文化大学創立四十周年記念事業趣意

大東文化大学（旧大東文化学院）は、大正十二年九月、貴衆両院の建議に基き、第四十六帝国議会の決議によって開校されたものであります。

当時大正の末期は、国民道德の腐敗、社会思想の混乱殊に甚しく、社会に深刻な不安と動揺を与え、その結果、三千年來培われた我が日本民族の伝統を輕視して徒らに新奇を好み、輕佻危激の風が流行する有様で、恰も我々が身を以て體驗した終戦直後の国狀に彷彿たるものがありました。こうした世相を憂慮して時の有識者達は大本遠吉氏（鉄相）を中心として、幾度か協議の末日本文化の根底をなす漢学並びに国学を振興すると共に、国内外に活躍する人材を養成し、以て時弊を匡救し国民精神の安定を計らんとしたのであります。

かくてこの趣旨を建学の理想とする大東文化学院が、貳百拾貳万円（現在の約拾億円）の国費以て、東京九段の地に設立されました。

その経営母体となつた大東文化協會は、平沼騏一郎（首相）、江木千之（文相）、山本悌二郎（農相）、小川平吉（鉄相）、大島健一（陸相）、鈴木喜三郎（法相）、水野錬太郎（内相）、島田俊夫（農相）、酒井忠正（農相）、木下成太郎（代議士）、加藤政之助（貴族院議員）等の人々が専らその運営に当り、教育部面では、井上哲次郎、鶴沢総明、服部宇之吉、小柳司氣太、市村瓚次郎、中村進午、松本愛重、深作安文、内藤虎二郎、狩野直喜、加藤虎之亮、国分高胤、安井小太郎、古賀貞吉、松平康国、牧野謙次郎、宇野哲人、塩谷温の諸教授が精魂を傾けて学生の指導に任ぜられた。

昭和十三年二月、時の貴族院議長松平頼寿氏が、大学の第七代総長に就任されるや、新たに東亜政経科を創設し学問研究の領域を拡大すると共に、大陸に活躍する人材の育成に努められた結果卒業生は相ついで満蒙、中国、東南アジア各地に進出し、時勢の要望に応えたのであります。昭和十六年二月、学生の急増に伴い、校舎を豊島区池袋に移転しましたが、この頃は政界、財界、学界の諸名士がこぞつて教育及び運営に参加され、「大東文化」の名の下に全国的教化運動を展開されました。

当時の役員としては、藤山雷太、清浦奎吾、古島一雄、牧野伸顯、犬養毅、徳川圀順、細川護立、前田米蔵、川村竹治、竹越与三郎、山本悌二郎、小川平吉、郷誠之助、徳富猪一郎、水野鍊太郎、安達謙蔵、山崎達之輔、平沼騏一郎、伊沢多喜男、三土忠造、若槻礼次郎、松本蒸治、近衛文麿、山岡萬之助、市木乙彦、岡田忠彦、倉富勇三郎、宮沢裕、浜田国松、馬場鉄一、江木衷、金杉英五郎、阪谷芳郎、堀田正恒、牧野良三、鵜沢総明、鳩山一郎氏等で、これ等の人々は、道義日本の建設、アジア民族の復興、ひいては世界平和の確立を目的とし、これを達成するためには、名節道義に徹した人材の育成こそ、刻下の急務であるとして、本学園の発展に力を致されたのであります。

昭和二十年四月、今次大戦の戦禍は遂にこの学園にも及び、校舎、施設は勿論、貴重な数万巻の古典籍は烏有に帰し、加うるに占領政策によつて政府の補助を断たれ、ために経営は深刻なる打撃を受けました。

然しながら、三千の卒業生、在校生父兄及び一般有志はこれが復興に一丸となつて尽力し、ついに昭和二十四年五月、新校舎を建設し、以つて今日に至つております。

省みるに戦後の日本は、思想は混乱し、道徳は頹廢し、就中、国家の将来を担う青年学徒は、その中にあつて徒らに過激化せんとしており、この儘放置すれば誠に国家の重大事となるやも計り難い状況にあります。

この時に当り、本学園はここに創立四十周年を迎え、愈々その建学の精神を発揮し、人材教育に専念すると共に更に先覚、同憂の記念事業後援会の御支援により現規模を拡張して尚一層の発展を計り、新しい時代の要請に応うべく、茲に記念事業の趣意を表明し、諸賢の御協力をお願い致す次第であります。

昭和三十六年四月一日

大東文化大学創立四十周年記念事業委員会委員長（理事長）

同

副委員長（学長） 南 条 徳 男
平 島 敏 夫

大東文化大学沿革

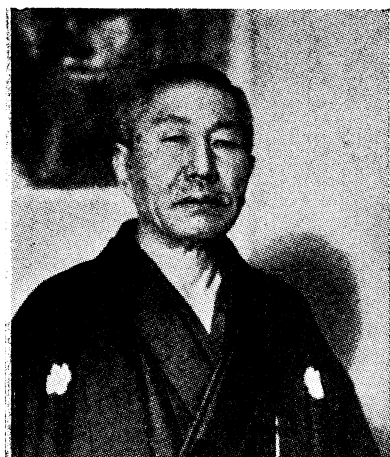
年 月 日	法 人	学 校
大正九年	大東文化協会創立	大東文化学院（高等専門学校）開校
大正十二年二月	大木遠吉会頭就任	
大正十四年二月	江木千之、小川平吉副会頭就任	
大正十五年四月	大島健一副会頭就任	
昭和二年六月	大島健一会頭就任	
昭和二年六月	平沼騏一郎会頭就任	
" 九月	会頭事務取扱に左の五氏就任	第四代総長 鵜沢総明（法博）
昭和三年十二月	平沼騏一郎、小川平吉、鈴木喜三郎、	第五代総長 大津淳一郎（衆議院議員）
昭和四年九月	山本悌二郎、鵜沢総明	
昭和七年一月	小川平吉会頭昇任	
昭和七年一月	小川平吉会頭辞任	第六代総長 加藤政之助（貴族院議員）
昭和十二年十二月	松平頼寿会頭就任、酒井忠正、木下成太郎副会頭就任	

昭和十三年二月	昭和三十六年六月
昭和十五年十二月	昭和三十三年四月
昭和十六年二月	昭和二十九年十二月
昭和十八年九月	昭和二十四年四月
〃 十月	〃 十二月
昭和二十年十二月	〃 十二月
昭和二十一年一月	〃 十二月
昭和二十二年十一月	〃 十二月
昭和二十三年四月	〃 十二月
副会頭法学博士 鵜沢総明会頭昇任	尾張真之介理事長就任
宮沢裕副会頭就任	南条徳男理事長就任
寄附行為改正により会頭を理事長と改む	
鵜沢総明理事長就任	
土屋久泰理事長就任	
(新制大学となる)	
第七代総長 松平頼寿 (貴族院議員)	第十代総長 藤塚鄰 (文博)
第八代総長 鵜沢総明 (貴族院議員)	第九代総長 酒井忠正 (貴族院議員)
第十一代総長 土屋久泰 (日本芸術院会員)	初代学長 土屋久泰
名譽学長 鵜沢総明	第二代学長 平島敏夫 (参議院議員)
	第三代学長 平島敏夫

大東文化大学建学の基礎となつた

「漢学振興ニ関スル建議案」にいついて

大東文化大学が創設される基礎となつた「漢学振興ニ関スル建議案」は大正十一年二月十日第四十六回帝国議會に呈出されたものである。提出者は木下成太郎を筆頭代表に西村丹次郎、副島義一、山本悌二郎、川島茂輔、鶴沢聰明氏ら十四名で賛成者として現在衆議院議長である清瀬一郎を始めとして、星島二



木下成太郎氏

郎、植原悦二郎、古島一雄、山本桑太郎、粕谷義三、大口喜六、吉田磯吉、頼母木桂吉、大津淳一郎、山道襄などの当時そうそうたる代議士七十九名が連署したもので党派を越えたものであつた。

その趣意は「本院ハサキニ全院一致ヲ以テ漢学振興ヲ刻下ノ急務トシ政府ニ適當ナル方法ヲ施サムコトヲ建議シタリ、此ノ趣旨ニ基キ政府ハ速ニ適當ノ方法ヲ講シソノ施設ニ著手セラレムコトヲ望ム右建議ス」というものでその理由書には「我が邦古来文化ノ中樞タリシ漢学ヲ今日ニ振興シ東洋古典ノ雄大ナル思想ト西洋科学ノ精緻ナル智識トヲ経緯錯綜シテ善ク是ヲ調和融合シ以テ内ハ天壤無窮ノ宝祚ヲ擁護シ國民思想ノ健全ナル発達を遂ケシメ外ハ東洋文明太和保合ノ精神ヲ發揮シ世界ノ文運ニ貢獻

セント欲セハ主トシテ先ツ之カ國民教導ノ任務ヲ負荷スヘキ当該碩学ノ相互研鑽ト新進後学ノ教養補習トニ供スル機關ノ設置ヲ急務トス是レ本案ヲ提出スル所以ナリ」とある。

この建議案の推進者木下成太郎氏は北海道五区選出政友会代議士で斗南と号し北海の太閤と異名をとつた異色の人物である。祖先は但馬国豊岡の藩主木下美作守祐元。父は豊岡藩の家老で勤王家、教育に熱心で藩校宝林義塾を起した人である明治十五年北海道幌別村に移住北海道開拓に従事した。木下成太郎氏は日露戦争第一次大戦以後急速に日本にはいつてきた外国思想、特にヨーロッパの自由思想、アメリカの唯物思想、ロシアの無政府、共產思想の混乱した状態を憂い、外来輸入思想万能時代に反撥、日本人の思想の自主性を確保すべく、東洋学芸の源流であつた漢学の復興、維持を志し儒教に関する建議案を両院に呈出して提唱以來七年間の後、漸く認められて大正九年に、大東文化協会を創設したのである。その後引続き右理由書のように学校の設置を建議して遂に世の多くの識者の賛同を獲得して大東文化大学の建学が実現するに至つたのである。

記念事業の目標

現在の教学並びに研究部門の内容を充実強化し、一貫せる人材教育を徹底せしむると共に学生生活の向上を期する為、左の諸条項を行う。

一、大学学部を増設し学科の充実を計り、施設設備を拡充す。

二、総合一貫教育のため、付属高等学校を設置する。

三、現在の付属大東柔道整復専門学校に衛生検査技師科を併せ大東医学技術専門学校とする。

四、東洋研究所、大東書道研修所を確立強化する。

五、図書館を拡充して研究習字の向上を期す。

六、講堂、体育館、運動場の設備を充実する。

七、学生寮を拡充して学生の厚生補導を助長する。

記念事業の概要

○校地の獲得

東京都板橋区志村西台町七、二〇〇坪：九千五百万円（測量ボーリング整地費等を含む）

○校舎の建築

〔第一期工事〕

高等学校大東医学技術専門学校：鉄筋四階管理室、東洋研究所、書道研修所：二階一、三五〇坪：老億四千万円（設計、監理費を含む）

〔第二期工事〕

大学：鉄筋四階図書館、学生寮：二階二、〇〇〇坪：貳億七千万円（設計監理費を含む）

〔第三期工事〕

講堂、体育館：鉄筋二階八六〇坪：九千七百万円（設計、監理費を含む）

○諸設備

機械、器具、図書、雑誌、教具、校具等：四千万円

総経費

五億四千叁百万円也

法人負担額 貳億四千叁百万円也

募金額 参億円也

備考

1 校地買収は昭和三十六年二月完了。

2 校舎の内、一、三五〇坪は昭和三十六年七月完成。

3 諸設備は別途に計画す。

大東文化大学
創立四十周年記念
事業建設資金募集要項

一、募 金 額 参 億 円 也

二、募金の種類

A 寄附金

イ 普通寄附金 一口五万円（二口以上、分割でも可）

ロ 特別寄附金 口数によらない寄附金

B 学 債 一口壹万円（成る可く二口以上）三年据置

三、申 込 方 法

同封の申込用紙をお願いします。

四、払 込 方 法

A 銀行振込

左記銀行（全国本支店）の大東文化大学創立四十周年記念事業募金口座に御払込み下さい。

募金取扱銀行 日本勧業銀行本店、東海銀行有楽町支店

〔以下の銀行は口座をつくる予定〕三菱銀行、富士銀行、三井銀行、住友銀行、第一銀行、大和

銀行、東京銀行、協和銀行、三和銀行、神戸銀行、北海道拓殖銀行

B 郵便振替貯金

大東文化大学振替口座 東京八八七一二番

C 大東文化大学後援会事務局宛直接払込み

D 払込を受けたものには、受領書を発行致します。

写

蔵税第 1227 号

昭和38年 9月13日

学校法人 大東文化学園

理事長 南条 徳男殿

大蔵大臣臨時代理

国務大臣 佐藤 栄作[㊤]

昭和36年 7月20日付で届出があつた寄附金については、法人税法第 9 条 3 項ただし書の規定に該当する寄附金として承認する。なお「法人の各事業年度の所得の計算上損金に算入する寄附金の指定に関する告示(昭和25年 7 月大蔵省告示第510号)」第 3 号に規定する大蔵大臣の定める期間は上記の承認の日から 1 年間とする。

五、法人寄附金の免税措置

法人税施行規則第八条の規定に基く「学校教育施設に対する免税方の件」については、左記写のとおり大蔵大臣の承認を受けましたので、会社法人のご寄附の金額は当該事業年度の損金に算入され、税金免除の措置が講ぜられますからご了承下さい。ただしこの免税取扱期間は昭和三十六年九月十三日から一ケ年間となつておりますので、この間の決算期に損金として計上できる次第であります。(但し分割払は御申込みの時の御指定による。)

尚、この募金に関するお問合せその他一切の御連絡は左記宛お願いします。

東京都千代田区永田町二丁目一番地

東京グランドホテル三二六号室

大東文化大学後援会

電話

(581)

〇四五一、九

後援会趣意書

大東文化大学は大正十二年、第四十六回帝国議会において、貴衆両院の建議に基き開校され、爾來四十年、眞乎たる日本人教育を為すと共に、世界の人々と交流して信頼と尊敬を受ける世界人教育を為すことを本旨とする独自の学風をもつて幾多の人材を育成してきました。

日本人たるの誇りを護持し、東洋の學術文化の伝統を愛し、これが伝承に大いなる関心をもつものにとつては、この大学の存在は誠に貴重なものであると信じます。

後援会長 岸 信介

(前総理大臣) (アイウエオ順)

副会長 椎名悦三郎

(前通産大臣)

司 忠

(丸善社長)

福田 赴夫

(元農林大臣)

足立 正

(東京商工会議所会頭)

綾部健太郎

(衆議院議員)

石井光次郎

(元通産大臣)

牛島 辰彌

(帝都高速度交通営団總裁)

賀屋 興宣

(元大藏大臣)

河合 良成

(小松製作所社長)

清瀬 一郎

(衆議院議長)

小菅宇一郎

(伊藤忠社長)

五島 昇

(東急社長)

坂 信彌

(大商証券社長)

佐藤喜一郎

(三井銀行会長)

佐野 隆一

(鉄興社々長)

塩谷 温

(文学博士)

菅 礼之助

(前東京電力会長)

杉 道助

(前大阪商工会議所会頭)

高碕達之助

(元通産大臣)

高木 幹夫

(東京海上火災社長)

大 東 文 化 大 学

今や大東文化大学が創立四十周年を迎うるに当り、飛躍的な振興建設計画を推進される事は、時宜を得た試みであり、心から賛意を表します。先覚同憂の遺業を継承、発展せしめるためにこの大学を後援することは、邦家のため大いに意義あることと確信致します。

茲に大東文化大学後援会を結成し、各位の御賛同御高援を御願ひ申し上げます次第であります。

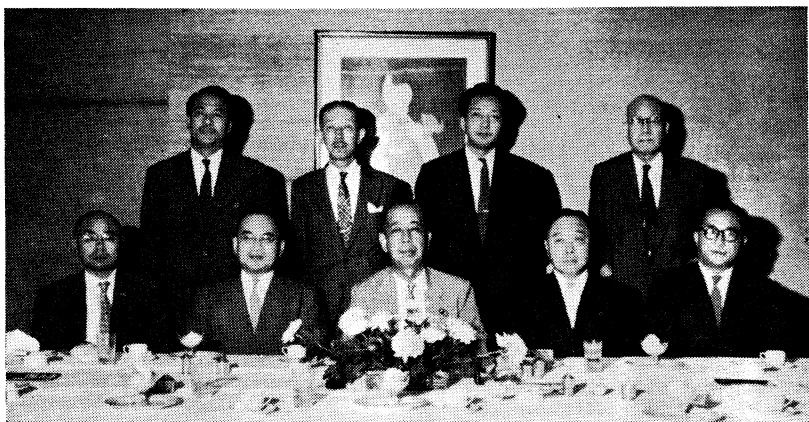
昭和三十六年七月二十八日

大東文化大学後援会

監 事

賛助会員

- | | | | | | | | |
|--------|-----------|-------|------------|-------|---------------|-------|-------------|
| 飛島 齊 | (飛島土木社長) | 松野 鶴平 | (参議院議長) | 山岡 莊八 | (作家) | 曾志崎誠二 | (第一信託社長) |
| 永野 護 | (元運輸大臣) | 藤井 健輔 | (飯野海運社長) | 中島 慶次 | (王子製紙社長) | 萩原吉太郎 | (北海道炭鉱汽船社長) |
| 中部 謙吉 | (大洋漁業社長) | 藤山 勝彦 | (大日本製糖社長) | 高城 元 | (日本商工会議所専務理事) | 本田 弘敏 | (東京ガス社長) |
| 永野 重雄 | (富士製鉄社長) | 藤井 崇治 | (電源開発総裁) | 石橋正二郎 | (ブリジストンタイヤ社長) | | |
| 新関八洲太郎 | (三井物産会長) | 俣野 健輔 | (飯野海運社長) | | | | |
| 挾間 茂 | (住宅公団総裁) | 松野 鶴平 | (参議院議長) | | | | |
| 檜垣 文市 | (安田火災社長) | 諸井 貫一 | (秩父セメント社長) | | | | |
| 藤山愛一郎 | (国務大臣) | 安岡 正篤 | (文学博士) | | | | |
| 藤山 勝彦 | (大日本製糖社長) | 山岡 莊八 | (作家) | | | | |



大東文化大学後援会だより

村田 克 巳
(後援会事務局長)

一、大東文化大学後援会の誕生

戦後、多くの私立大学が、戦災から立ちあがり、豪壮なビル建築を行い、教育のマス・プロ化を行っていた時、大学は目白西北方の旧来の地でひっそりと家庭的環境の中で塾的教育をモットーにして敗戦後の激動の中を建学の伝統を維持してきた。然るに三十五年頃から、建学の精神を現代に生かして拡大発展すべきだという意見が学校当局、卒業生、学識経験者の一致するところとなつて、三十六年に入るや急速に後援会結成の段取りとなり数度の会合を経て、遂に前総理大臣、岸信介氏を会長にして後援会が誕生するに至つた。上の写真は七月十一日後援会結成当時の記念写真である。前列左からユースホステル副会長中山正男氏、そごう社長法学博士水島広雄氏、岸前総理、南条元農相、堀田太郎学園常

任理事、後列左から金子昇学園事務局長、教授小林元学園理事、村田克巳後援会推進委員
太田亥十二元東京ガス会長。

二、大東文化大学後援会発会式挙行

—(昭和三十六年七月二十八日)—

岸前総理を中心にして、大東文化大学の振興建設計画の遂行を援助し、その建学の精神を現代に生かそうとする大東文化大学後援会は、大東文化大学後援会趣意書を広く政界、財界学界に送つて、同憂の士の協力を懇請し後援会役員を委嘱していたところ、早速多数の方々の御承諾を得たので、酷暑の候のこととて大半の人々が外遊出張等で在京されなかつたが、諸般の都合上七月二十八日にホテルニュージャパンで発会式を行つた。

当日までに後援会役員を承諾された方々は左の通りであつた。(敬称略、順不同)

イ、政界

清瀬一郎（衆議院議長） 松野鶴平（参議院議長） 藤山愛一郎（国務大臣経済企画庁長官） 石井光次郎（元通産大臣） 高碕達之助（元通産大臣） 賀屋興宣（元大蔵大臣） 福田赴夫（元農林大臣） 綾部健太郎（衆議院議員） 椎名悦三郎（前通産大臣）

ロ、財界

足立正（東京商工会議所会頭） 石橋正二郎（ブリジストンタイヤ社長） 牛島辰弥（帝都高速度交通営団総裁） 菅礼之助（前東京電力会長） 五島昇（東急社長） 曾志崎誠二（第一信託社長） 坂信弥（大商証券社長） 佐野隆一（鉄興社社長） 佐藤喜一郎（三井銀行会長） 杉道助（前大阪商工会議所会頭） 高木幹夫（東京海上火災社長） 飛鳥斉（飛鳥土木社長） 中島慶次（王子製紙社長） 小菅宇一郎（伊藤忠社長） 新関八洲太郎（三井物産会長） 俣野健輔（飯野海運社長） 諸井貫一（秩父セメント社長） 藤井崇治（電源開発総裁） 河合良成（小松製作所社長） 本田弘敏（東京ガス社長） 檜垣文市（安田火災海上社長） 中部謙吉（太平洋漁業社長） 司 忠（丸善社長） 藤山勝彦（大日本製糖社長） 永野重雄（富士製鉄社長） 挾

間茂（住宅公団総裁） 高城元（日本商工会議所専務理事） 萩原吉太郎（北海道炭鉱汽船社長）

ハ、学界言論界

塩谷温（文博東大名誉教授） 安岡正篤（文学博士） 山岡壮八（作家） 藤沢親雄（日大講師）

発会式は、岸会長、清瀬一郎衆議院議長

藤山愛一郎国務大臣、藤井崇治電源開発総裁 坂信弥大商証券社長、塩谷温博士、藤沢親雄 元九大教授、飛鳥土木社長大学側から南条徳男理事長、平島敏夫学長（参議院議員）及び水島広雄理事（法博さこう副社長） 寿原正一理事（代議士） 中山正男理事らの新任理事及び堀田、金子坂本理事、大学父兄会長下嶋儀貞、東洋研究所事務局局長野尻哲二私大協会の矢次専務理事らの出席を得て挙行された。

定刻村田後援会事務局長の司会によつて開会。岸会長の挨拶に引続いて議事に入り、座長の選任が行われた。その結果、座長に、最年長者でありかつ大東文化大学開設の基となつた大正十二年国会に対する建議案の提案者の一人であつた清瀬一郎衆議院議長が推されて議事に入つた清瀬座長の議事進行のもとに後援会趣意書、会則を審議、後援会役員は会長

一任として、議事を終了。引続き昼食を共にして懇談会に移り、平島学長の感謝の辞、塩谷博士の激励の詩吟、藤井電発総裁、坂大商証券社長、飛鳥土木社長らの挨拶、矢次私大協会専務理事の私学の実態に対する陳情があり盛会裡に終了した。（グラビア参照）

岸後援会長のあいさつ

ただいま司会者から本日の会合の趣旨について、申し述べた通りでございますが、大変お暑いところであり、またお忙しにかかわらずお集まりをいただきまして厚くお礼申し上げます。大東文化大学のことに關しましては、その目的とするところ、内容等についても、みなさま十分ご承知のことと思いますが大正十二年に当時の貴衆両院の建議に基いて作られたものであり、また當時はもろんのこと、その後も引続いてわれわれの先輩が、この大学の使命を達するために非常なご努力があつたんでありますが、戦後こうした社会教育、万般の非常な変革にあつて、いろいろの点において困難な状態にあつたわけであります。私、現在の学長からこの状況を承りまして、なんとかわれわれ後進のものがひとつ大東文化大学建設の趣旨を十分に到達するよ

うにお力ぞえもし、またご協力申しあげると
いうことは、われわれの責任であり、また現
在の情勢、あるいは将来の日本の発展を考え
てみるというところ、この大東文化大学の内容を
充実し、その本来の目的を十分に達成さしめ
るようにすることが必要であるということをも
痛感いたしました、微力ではありますが大東
文化大学の後援会の会長を引受け同志である
南条君に大学の理事長を引受けてもらいまし
て、相共に協力して、各方面の同愛の士にお
願いをして皆様のご協力とご支援のもとにこ
の大学の内容を充実し大学本来の目的を達す
るために後援をいたしたいと、かように存じ
てご案内申しあげたところが、われわれに対
して快く役員をお引受け願ひ、ご支援をいた
だくことになりましたことを、心からお礼申
しあげます。

なかなか学校の問題に関しまして、学校
もたくさんございますし、またほかの大学と
ちがひまして、卒業者が最後の学校を支援
するというような人が非常に少ないのでござ
いまして、したがってどうしても財界その他
の方々のご支援をいただかなければならん
ということでありまして、このことに関しまし
て、今後格段のご支援をいただきますように

お願い申しあげます。(速記より)

南条理事長あいさつ

それでは私から今日の発会式につきまして
みなさまに一言ごあいさつ申しあげたいと思
います。

おかげさまでただいまお聞きのように発会
式はめでたく終了しました。理事者側といたし
まして、まことに感謝にたえない次第でござ
いまして、岸会長はじめご列席のみなさま方
に対して、厚くお礼の言葉を申しあげる次第
であります。私は不肖な身でございますが、
このたび大東文化学園の理事長を引受けるに
いたりしました経過でございますが、実はこの
大東文化学園が、さきほどいとお話のよう
に、大正十二年に時の貴衆両院の建議により
決議によつて、学校が国の補助金によつて、
当時約十二万円、現在に換算すると十二億だ
そうですが、全部国費でできたんです。その
ときに大木伯、あるいは山本錦二郎、小川平
吉、大津淳一郎とか、加藤政之助とか、いろ
いろな政界の先輩の方がこの学校の会長、理
事長を引受けられたわけであります。たまた
ま私の北海道の政界の先輩でありました木下
成太郎氏がこの協会の副会長をしておりまし

て、さような関係で私が昭和十一年に当選い
たしましたその翌年でございますが、大東文
化学園もだんだん発展して、九段にあつたん
でございますが、狭くなつたし、ひとつどつ
かへ拡張したいというので、たまたま松平頼
寿さんがそのときの会長でございましたが私
もその建設に協力いたしましたので、ただいまの
池袋の場所を選定して、そこに学校ができた
ことを承知いたしておるのでございます。さ
ような関係で、自分の政界の先輩の木下成太
郎氏の関係で、この大東文化学園に縁故がで
きたわけですが、その後私もいろいろ
聞いておつたのであります。しかるところ、
今回岸さんがこの大東文化学園の学校の性格
また日本の教学刷新という建前から、ぜひこ
ういう特殊な学校というものは大いに発展さ
せなければならんというご趣旨のもとに後援
会長を引受けくださった。したがつてまえ
から縁故のあるおまえもひとつ理事長を引受
けてやつたらどうだということで引受けるこ
とになつたようなわけであります。

さきほどいご承知のように、この学校の
創立の趣旨というものは、まづたくこの当時
の思想の混乱のときにあたりまして、先輩が
非常に日本の前途を憂慮して、日本の民族の

将来のために起されたもので、この和魂漢才と申しますか、日本魂を基礎にした漢学、あるいは洋学というようなものを身につけて国際的に日本民族が伸びるような学風を作るということで発足したのでございます。今日終戦後におきます日本の教学を見ますときに、ちようどその当時とまったく同様の感があるのでありまして、今日、日教組がますますさかんになり、今日の日本の教育というものが、何人も考えますように、なんとか改善しなければならんという声は巷に満ちておる次第でございます。こういう時にあたつて、とくに日本の民族の骨となり、血液となるべきところの学風は、なんと申しましても全学連というような、官学——政府が大きな国費をついやしておる学校に、非常に容共的な思想が多いということは、国民等しく遺憾に思う次第でございます。この大東文化学園だけは、少なくとも、私学であつて、そして足りない費用で学校を経営するについても、学生思想だけは、全学連などというものは一人も出さないような方向にもつていきたいと私も考えるような次第でございます。さいわいに今日まで見ますと、他の私学には全学連の会があるけれども、この学校にはさよう

な芽生えがないということは、まことに私もは意を強うしておるようなわけでございますので、今後もしやういう方針に基いて学校の経営を進めていきたい。また私どもの先輩、友人の財界の人に聞きましても、先輩の人に聞きましても、このごろうつかり学校の推せただけで就職、入社試験などをして、入つてからあとにおいて労働組合の幹部になつたり、あるいはストライキのリーダーになつたりして、非常に会社の経営上不安が多い、そこで入社する学生養成等についても、安心して入社できるような学生がほしいということを開く次第でございます。かような点を考えますときに、この大東文化学園を卒業したものは、今後普通の試験がなくても安心して入社させられるような思想の堅実なる卒業生を出したい。このことは日本の経済の発展のうえに、また日本の民族の発展のうえに、非常に大事なことではないかと考える次第でありまして、そういう教育をすることによつて、財界からも大きな支援を得るのではないかと考えますので、このへんも今後お集まりのみなさま方から、十分いろいろなお知恵を拝借しまして運営を考える次第でございます。

まことにきようはこういう立派な後援会の

発会式を作つていただきまして、われわれ理事者といたしまして、ほんとうに感謝にたえない次第でありまして、一言お礼を申しあげて、今後のみなさま方に対するご協力をお願いする次第でございます。ありがとうございます（速記より）

当日承認された会則は左の通りである。

大東文化大学後援会会則

（名称）

第一条 本会は大東文化大学後援会と称する。

（事務所）

第二条 本会の事務所は大東文化大学内に置く。

（目的）

第三条 本会は大東文化大学の経営を後援し大学の振興発展に寄与する事を目的とする。

（事業）

第四条 本会は右の目的を達成するために次のことを行う。

(1) 寄附金の募集

(2) 大学振興に有効なる事業

（会 員）

第五条 本会の目的事業を協賛する者を以て
会員とする。

会員は一口金五万円以上を寄附する。

会員は大東文化大学の研究調査を利用する
ことができる。

(会長)

第六条 本会に会長・副会長を置く。

会長は本会を代表し、その事務を総理す
る。

副会長は会長を補佐する。

(運営委員)

第七条 本会の企画、運営、会務執行のため
運営委員若干名を置く。運営委員は会長が
委嘱する。

(監事)

第八条 本会の業務並に会計を監査するため
に監事二名を置く。監事は会員中から選
ぶ。

(事務局)

第九条 本会の業務遂行のため事務局を設け
る。

会計に関しては学校法人大東文化学園事務
局にその事務を委嘱する。

(会費の使途)

第十条 本会の会費は本会の運営に必要な経

費の外は大東文化大学の振興のために支出
する。

(会計年度)

第十一条 本会の会計年度は、毎年四月一日
から翌年三月三十一日に終る。

三、後援会役員の組織

発会式において、役員組織を会長に一任さ
れたのでその後の役員承諾者を加えて人選の
結果、左のようにお願いすることとなった。

後援会役員名

(十月一日現在)

会長 岸 信介
副会長 椎名 悦三郎

福田 赴夫

司 忠

運営委員

(◎は常任委員 アイウエオ順)

足立 正

綾部 健太郎

石井 光次郎

牛島 辰弥

賀屋 興宣

◎河合 良成

清瀬 一郎

小菅 宇一郎

五島 昇

◎坂 信弥

佐藤 喜一郎

佐野 隆一

塩谷 温

菅礼之助

◎杉 道助

高崎 達之助

高木 幹夫

飛鳥 斉

◎永野 重雄 中部 謙吉
挟間 茂 新関八洲太郎

藤山 愛一郎 榎垣 文市

藤井 崇治 藤山 勝彦

松野 鶴平 俣野 健輔

安岡 正篤 諸井 貫一

中島 慶次 山岡 莊八

監事 石橋 正二郎 高城 元

賛助会員 萩原 吉太郎 曾志崎 誠二

安西 正夫 本田 弘敏

市川 忍 石光 栄

藤沢 親雄

四、募金計画の策定

後援会事務局では後援会監事、東京商工会
議所専務理事高城元氏の協力を得て他の学校
法人宗教法人などの募金の実情を比較検討し
た大東文化大学振興建設資金の募金目標額三
億円達成のため業界毎及び各法人に依頼する
額の詳細な案を策定した。

五、第一回後援会総会

十月四日、岸会長が帰朝されたので後援会
発足後、最初の会員総会を十月十二日正午ホ
テルニュージャパンで開催した。当日は政財



界等の当代一流の後援会員の方々が出席された。出席者は左の通りであつた。(写真参照)

岸会長、椎名悦三郎、司 忠、福田赴夫の副会長、杉道助、河合良成、永野護、永野重雄、賀屋興宣、本田弘敏、安西正夫、市川忍坂信弥、挾間茂、飛島資、塩谷温、曾志崎誠二、石光榮の諸氏、大学側からは南条理事長、山地常任理事、太田亥十二、水島広雄、中山正男、金子昇、坂本通、小林元の諸理事、村田事務局長の司会で開会、岸会長、南条理事長がこもこも立つて挨拶が行われ大東文化大学振興計画の現状が述べられ財界の強力な協力を懇請された。引続き岸会長の外遊所感を述べられ、昼食を共にし、懇談後散会した。

六、募金活動の開始

(1) 十一月二日、ホテル、ニュージャパン岸事務所にて、後援会から岸会長、椎名、福田副会長、高城元監事、村田事務局長、大学側から南条理事長、山地常任理事、金子理事、出席のもとに先に策定した募金計画書に基づき募金活動について検討。岸会長、椎名、福田副会長、南条理事長の間にそれぞれ業界及各会社に対する募金依頼の担当を申合せて、募金活動の実動に入ることになった。

(2) 右申合せに基づき南条理事長は、精糖工業会製菓団体連合会紙バブル連合会等に募金の協力方を依頼した。

(3) 岸会長、南条理事長は十一月二十二日八幡製鉄、富士製鉄、日本鋼管各社長と会談募金趣旨の説明を行い協力を懇請、十二月十五日には日本鉄鋼連盟常務懇談会の席上で募金趣旨の説明協力を懇請した。

(4) 岸会長、福田赴夫副会長は日本銀行総裁山際正道氏に募金を依頼した。

(5) 水島理事、中山理事は銀行融資、長期借入金の運動を行った。

(6) 太田理事は東京ガスを始めガス関係会社及び百貨店業界の募金懇請を行なった。

(7) 中山正男理事は大阪商工会議所朝田専務理事に関西財界の募金協力方を懇請、また森永製菓、森永乳業より募金した。

(8) 山地理事、村田事務局長は、硫酸工業協会、紙バブル連合会東京商工会議所建築工業会、百貨店協会、土木工業会、マッチ工業、ガス協会、銀行協会等にそれぞれ募金趣旨を説明、寄附協力方を懇請した。

(9) 岸会長は、経団連植村甲午郎、大谷重工業社長、佐藤三井銀行会長、杉道助前大阪商工会議所会頭に協力を懇請した。(以下略)

寄付者御芳名 (受附順)

金壹百五拾万円

日本甜菜製糖株式会社

取締役社長 長野 善三殿

金壹百五拾万円

大日本製糖株式会社

取締役社長 藤山 勝彦殿

金五拾万円

中外製菓株式会社

取締役社長 上野 十蔵殿

金壹百万円

名古屋精糖株式会社

取締役社長 横井 広太郎殿

金五拾万円

芝浦精糖株式会社

取締役社長 大波 信夫殿

金壹百万円

株式会社小松製作所

取締役社長 河合 良成殿

金五万円

日本銀行

総裁 山際 正道殿

金七拾万円

台糖株式会社

取締役社長 武智 勝殿

金壹百万円

森永製菓株式会社

取締役社長 森永 太平殿

追記

一月十六日、日本鉄鋼連盟(会長小島新一)は本大学の募金依頼額式千五百万円に協賛することを承認した。その各社負担額は左の通りである。

金六百六拾五万円

八幡製鉄株式会社

取締役社長 小島 新一殿

金五百式拾参万円

富士製鉄株式会社

取締役社長 永野 重雄殿

金参百式拾八万円

日本鋼管株式会社

取締役社長 河田 重殿

金式百六拾参万円

川崎製鉄株式会社

取締役社長 西山 弥太郎殿

金壹百七拾六万円

住友金属工業株式会社

取締役社長 広田 寿一殿

金壹百九万円

株式会社神戸製鋼所

取締役社長 外島 健吉殿

金壹百万円也

日新製鋼株式会社

取締役社長 岡田 儀一殿

金八拾九万円

株式会社中山製鋼所

取締役社長 中山 育雄殿

金八拾七万円

尼ヶ崎製鉄株式会社

取締役社長 町 永三郎殿

金参拾九万円

東都製鋼株式会社

取締役社長 藤川 一秋殿

金参拾式万円

淀川製鋼株式会社

取締役社長 浜田 正信殿

金参拾万円

大同製鋼株式会社

取締役社長 石井 健一郎殿

金式拾万円

株式会社日本製鋼所

取締役社長 柳 武殿

金拾九万円

久保田鉄工株式会社

取締役社長 小田 原大造殿

金拾式万円

特殊製鋼株式会社

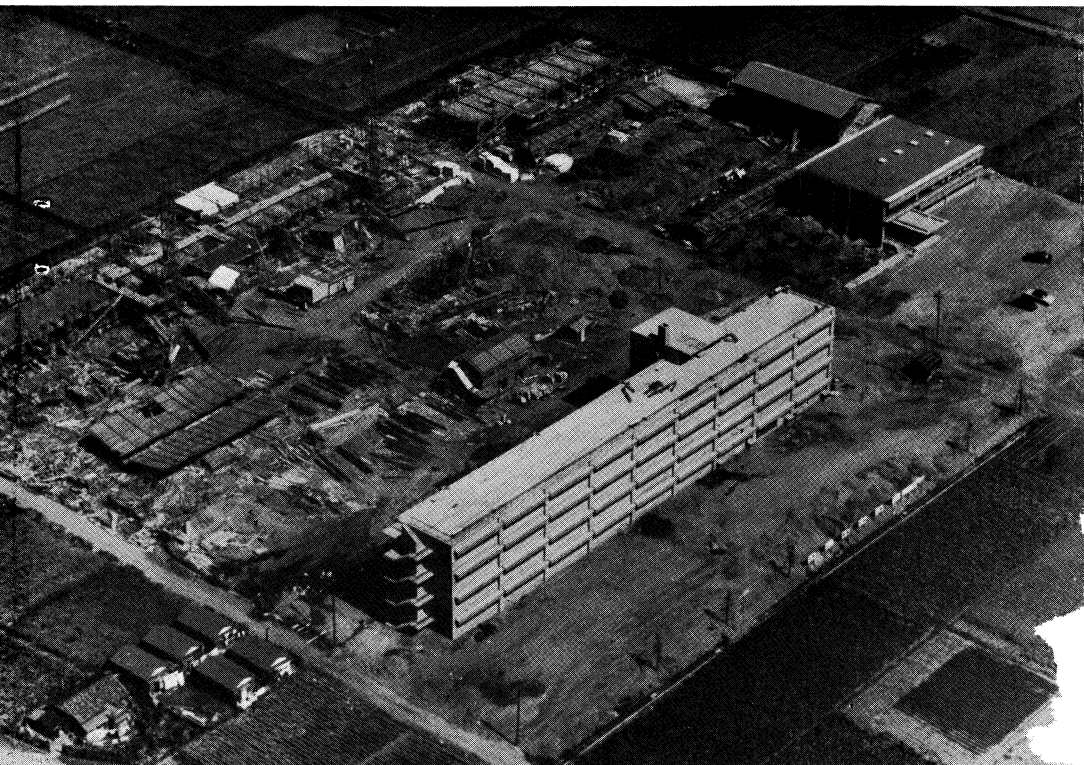
取締役社長 石原 正美殿

金壹拾万円

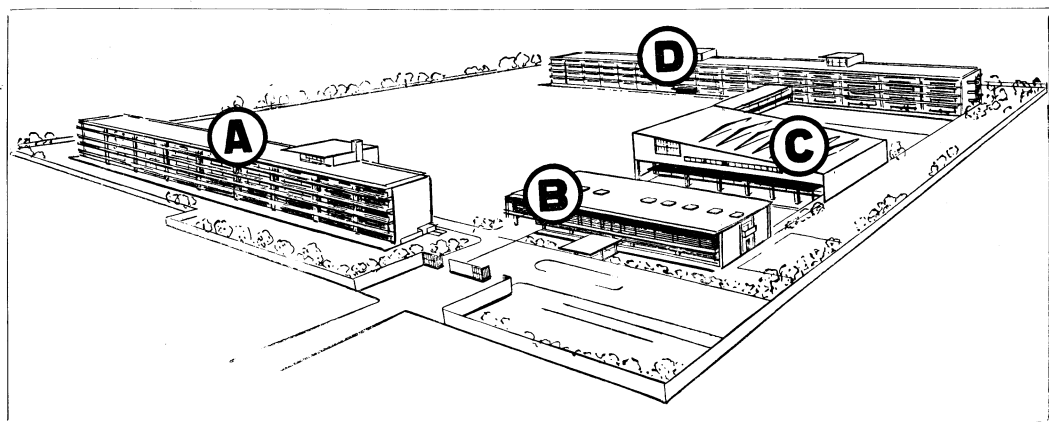
日本特殊鋼株式会社

取締役社長 大河 原正太殿

建設中の大東文化大学全景



大東文化学園全景見取図



Aは校舎完成 Bは図書館及び本部事務室（半分完成） Cは体育館（建設未定） Dは校舎建設中

大東文化大学後援会事務局

大学

東京都板橋区志村西台町一九〇二

電話 (933) 三一六六―八番

事務局

東京都千代田区永田町
東京グランドホテル三一六号室
電話 (581) 〇四五一―九番